性用語のイメージに関する調査

川崎医療短期大学　第二看護科　大津市民病院附属看護専門学校*　順正短期大学**

人見　裕江　　斎藤　一江*　郷木　義子**　斎藤美智子**

（平成５年８月23日受理）

An Investigative Report on Images of Sexual Words

Hiroe HITOMI, Kazue SAITO*
Yoshiko GOKI** and Michiko SAITO**

Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions
Kurashiki, Okayama 701-01, Japan
*Nursing School Attached to Otsu Citizen Hospital**
Otsu, Shiga 520, Japan
*Junsei College**, Takahashi, Okayama 716, Japan*
(Received on Aug. 23, 1993)

Key words：性用語，イメージ，精神保健

概　　要

人間としての性についての高校生（看護科）と看護学生の認識を知りたいと考え，①性用語のイメージ，②自己や親・友人に対する気持ちや生命の捉え方について調査し，高校生と看護学生とで比較した。①の用語を「生殖の性」「女性の性」「思春期」「両性の性」「生殖の中絶」「男性の性」の６つにラベル化し，整理した。②は自由記載したものを KJ 法により分類した。生殖の性に関する用語は明るく，妊娠中絶・避妊には暗いイメージを持っている者が多い。それらは看護学生に顕著にみられる。また，看護学生に女性の性用語は明るく，男性の性用語は暗い傾向がみられる。自己や親に対し，高校生は否定的，看護学生は肯定的な傾向がある。看護学生は生命や生き方への考えも明確になってきている。これらは青年前期の発達課題と合致する。この結果より，発達課題に応じた授業展開が必要であると考える。

はじめに

新カリキュラムにおける精神保健の性に関する教育内容・方法の検討は，思考錯誤の現状であり重要な課題である。精神保健では性に関する偏ったイメージや偏見をなくし人間の性の多元性を理解させ，生き方や人間関係との関連で考えさせたい。

しかし，今日の性をめぐる情勢は，性をタブー視する傾向は残る一方，性情報は氾濫し，興味本位に取り扱ったものや，性の商品化，妊娠中絶の若年化など様々な問題がある。それに伴い思春期から青年期を過ごす生徒・学生の性意識も変化してきている。

したがって，学習者の性に関するイメージや特性を理解し，発達段階を考慮した教育内容の検討が必要である。ここでは，その一貫として調査した性用語のイメージと，自己や親・友人に対する気持ちや生命の捉え方について述べたい。

１．研究目的

精神保健の性の教育内容検討のために①性用語のイメージ，②自己や親・友人に対する気持

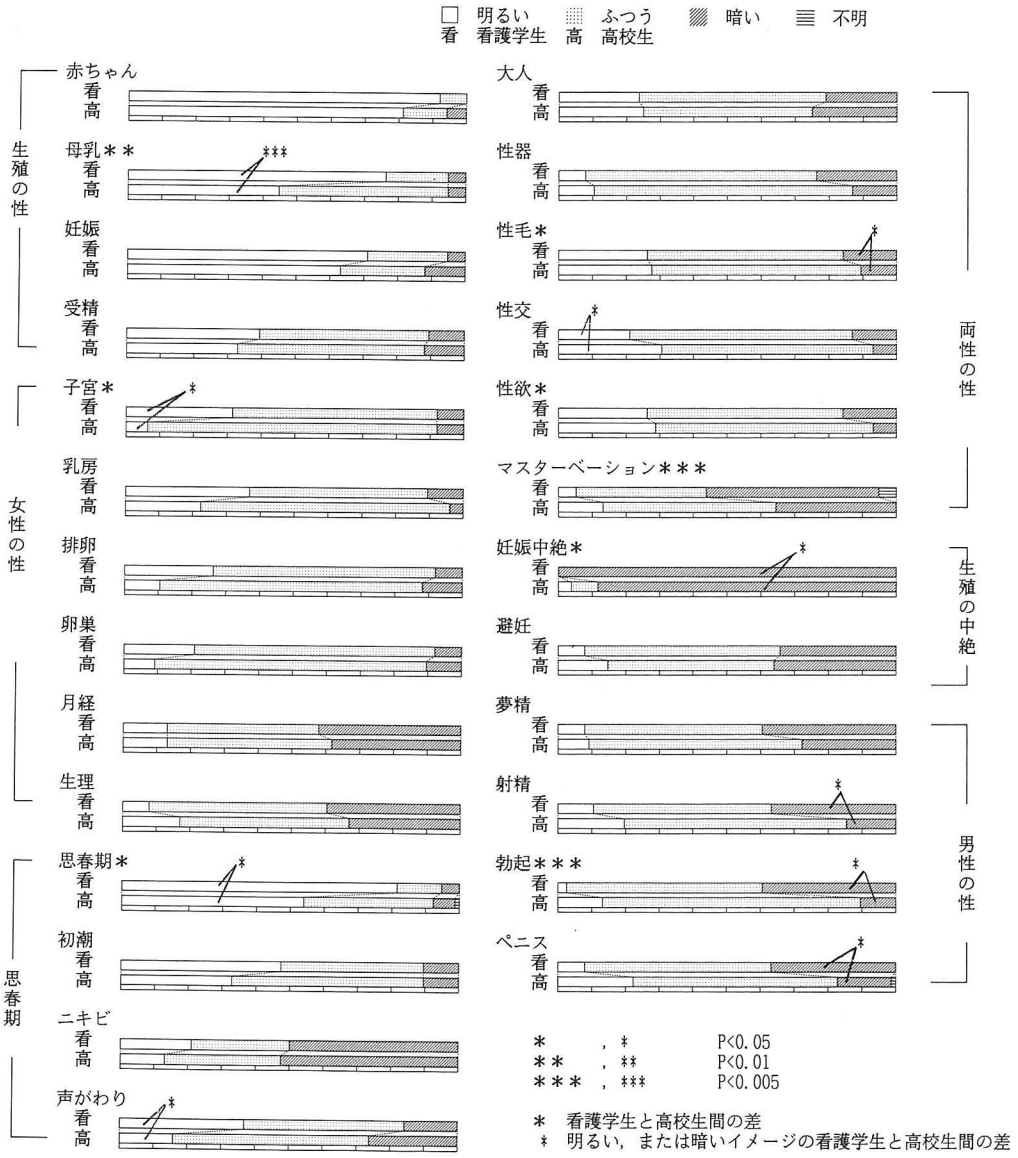

図１　性用語別イメージ

ちや生命の捉え方を知る。それらを高校生と看護学生とで比較する。

２．研究方法

女子高校生（看護科）２年生76名と看護学生１年生38名を対象に，精神保健の性の授業前に質問紙による調査を行った。①は北沢[1]とピーター・メイル[2]の絵本から26の性用語を抽出した。その用語のイメージの明暗を５～１点として問い，検討した。検討する中でこれらの用語を「生殖の性」「女性の性」「思春期」「両性の性」「生殖の中絶」「男性の性」の６つにラベル化し，整理した。②は自由記載したものをKJ法により分類した。①②各々集計にあたっては，全体と学校別に集計し，全体の傾向・学校間の差をみるためにカイ二乗検定を行った。

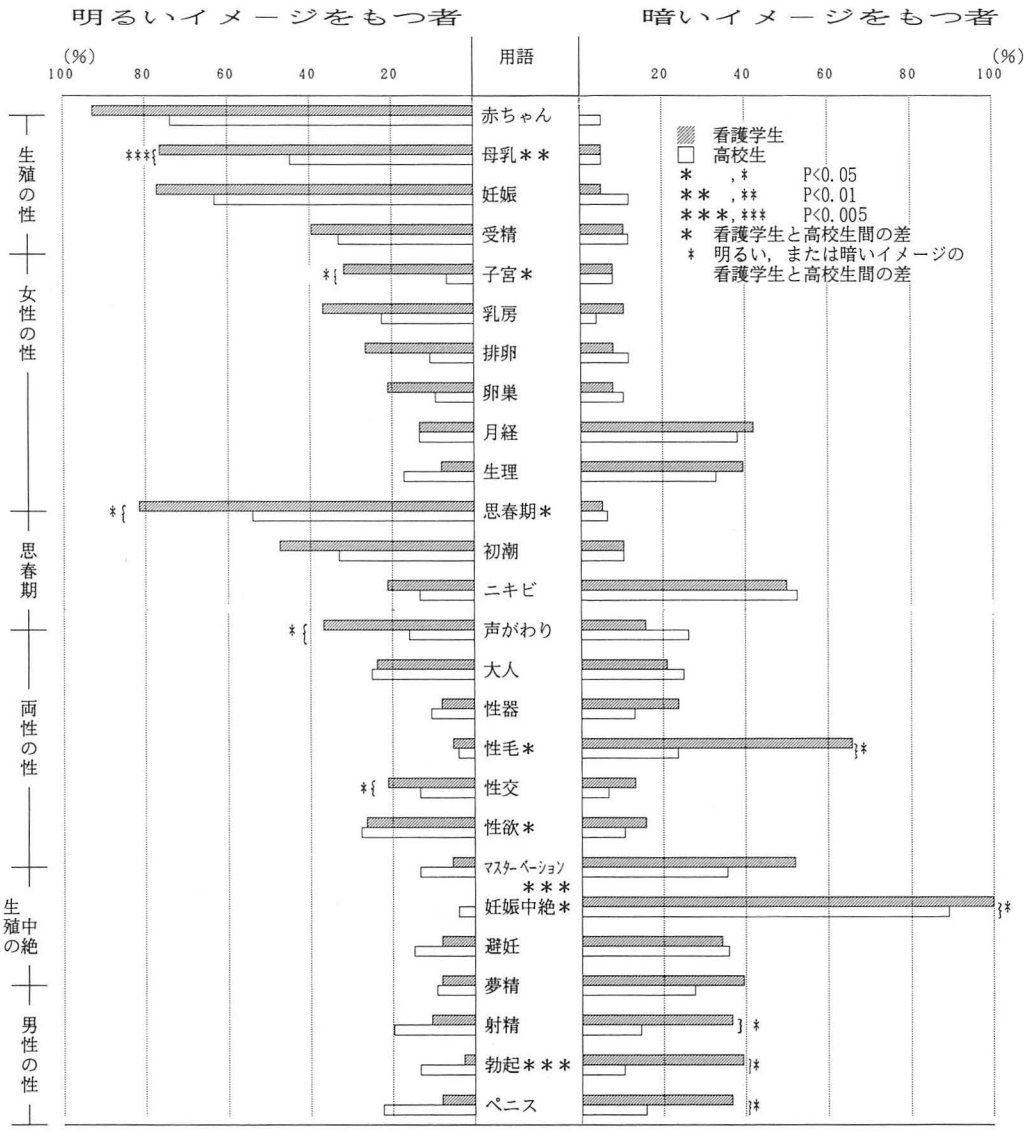

図２　性用語別イメージ

３．結　　果

①性用語のイメージ（図１，２，３参照）ふつうのイメージを持つ者（以下，「ふつう」とする）が半数以上を占める用語は，26用語のうち看護学生15，高校生19と全体的に「ふつう」が多い。明るいイメージを持つ者(以下,「明るい」)が多い用語は，赤ちゃん・妊娠・母乳・受精の生殖の性に関する用語である。特に母乳ではP<0.01で有意差がみられる。

更に，看護学生は明るいイメージが顕著であり，母乳の明るいイメージは高校生との間に有意差がみられる（P<0.005）。

思春期と女性の性用語は，「ふつう」が最も多いが，次いで「明るい」が多く，「暗い」は少ない。高校生より看護学生の方が明るい傾向にあり，思春期・子宮では有意差があり，高校生と看護学生の明るいイメージ間に有意差がみられる（P<0.05）。声がわりは看護学生は明るい傾向であり，高校生はむしろ暗い傾向にあり，明

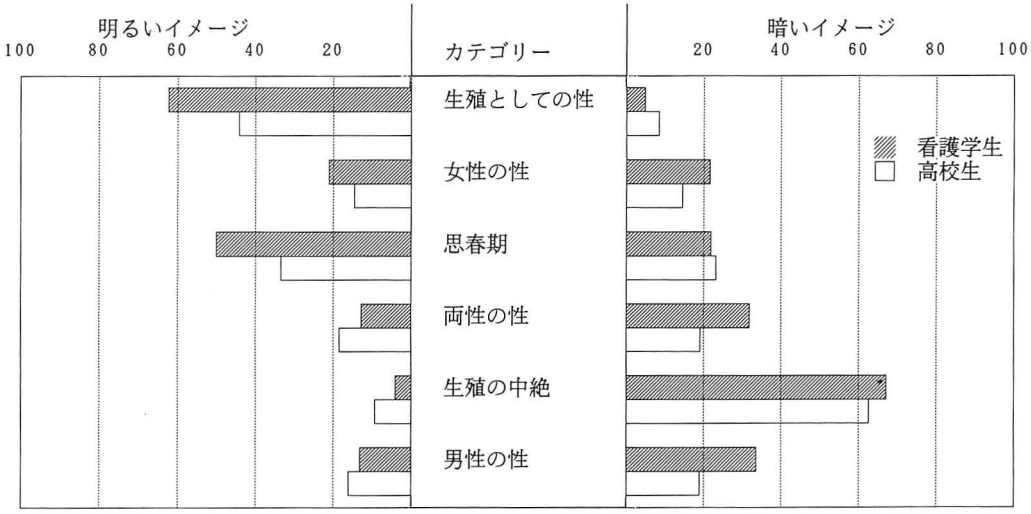

図3　カテゴリー別性用語のイメージ

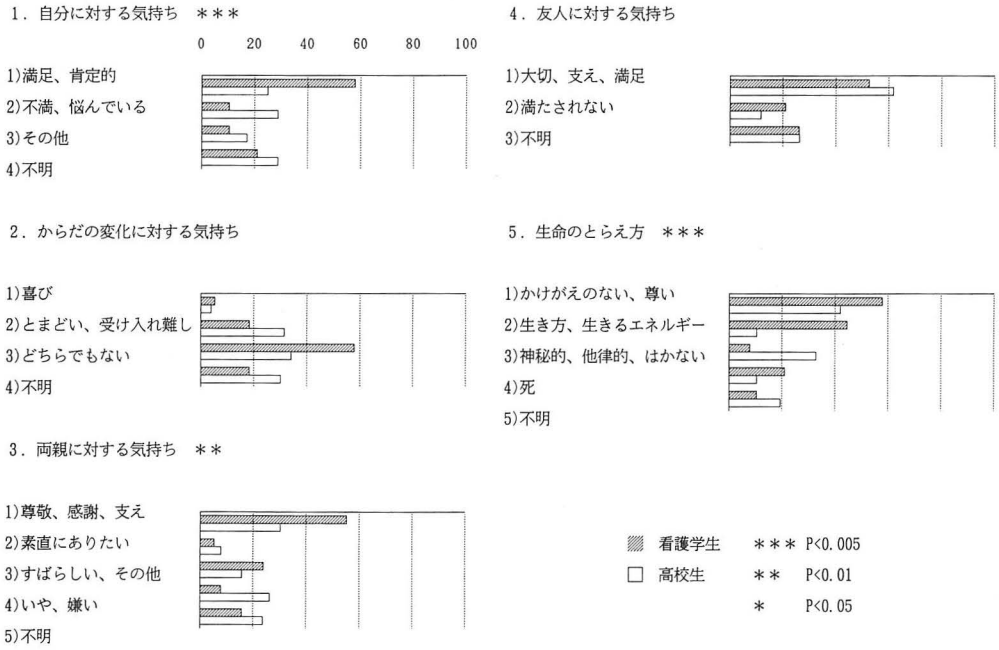

図4　自己，両親，友人に対する気持ちと生命のとらえ方

るいイメージ間に差がみられる（P<0.05）。

妊娠中絶・避妊のように生殖を中絶するもので，暗いイメージをもつ者が多く，妊娠中絶には有意差がみられ，高校生と看護学生の暗いイメージ間に有意差がみられる（P<0.05）。

両性の性に関する用語は，「ふつう」が多いが，看護学生は暗い傾向がある。性毛・性欲・マスターベーションでは有意差がみられ（P<0.05, P<0.05, P<0.005），性交の明るいイメージは高校生と看護学生で有意差がみられる（P<

0.05)。

男性の性に関する用語は，「ふつう」が多く，看護学生は暗い傾向がある。勃起では有意差がみられ（P<0.005)，射精・勃起・ペニスの高校生と看護学生の暗いイメージ間に有意差がみられる（P<0.05)。

以上，高校生と看護学生において「明るい」では母乳・子宮・思春期・声がわり・性交に，「暗い」では妊娠中絶・性毛・射精・勃起・ペニスについて有意差が認められる。

②自己や親・友人に対する気持ちや生命の捉え方（図4参照)。

看護学生は自分に対して満足している者が多く，高校生は不満・悩んでいる者が多い。

身体の変化に対しては，とまどいや受け入れ難さが高校生の方が多い。

両親に対して尊敬・感謝の気持ちは看護学生に多く，嫌いは高校生に多い。

友人に対しては，半数以上が満たされており，差はみられない。

生命の尊さと生き方や生と死の考えを述べた者は看護学生に多い。一方，神秘的・他律的ではかないとした者は高校生に多い。

4．考　　察

性用語のイメージで高校生の方が「ふつう」と答えた者が多い。これは，用語からのイメージであるため性への関心や用語に関する知識や社会情勢，体験などが高校生の方が少ないことが影響していると思われる。

生殖の性について明るいイメージを持つ者が多いのは，生命の尊さと生命を生み育てるという人間の幸福と関連させてとらえていることがわかる。生殖の性の意義は，歴史的に市民権を得ているものである。妊娠中絶は生命の誕生・尊重に反するものであり，暗いイメージが多いのは生命の大切さ・かけがえのなさが根底にあることを伺わせる。これは生命の認識の結果とも合致する。体内の小さな生命を守り育てることができないのは，余程の事情が察せられ，不幸で悲しいできごとであることと重なり暗いイメージを持つと考える。以上，生殖の性に対する明るいイメージが看護学生の方に顕著なのは，看護学生が生命や人間の性と死について自己の考えを持ち，生命を生き方の問題として理解できるようになっているからではないか。これらから，人間にとっての性の意義を生殖だけでなく，生き方や人間関係・性役割などの性の意義についても理解できるよう教育内容の検討が求められる。

看護学生は女性の性用語には明るく，男性の性器や性行動を表す用語は暗いイメージを持つ傾向がある。これは中学校や高校における性教育が女子には女性の性行動（初経教育）中心であることと関連するのではないか。人間の性行動，特に男性の性行動の正しい理解ができていないのではないかと考える。

マスターベーションはどちらかといえば男性の性をイメージしやすく，体験状況も男性の方が多いことから男性の性行動と結びつけてとらえやすい。また，従来より陰湿で否定的なイメージをもちやすいことも関連していると考える。このことからも男性の性行動の正しい理解が必要となる。

女性の性用語の中でも月経・生理は，苦痛や不快を伴うことから暗いイメージを持つと考える。思春期・初潮が明るいのに比してニキビが暗いのは，不快な体験が影響したものと考える。思春期は過ぎ去った看護学生の方がようやく越えた段階の高校生より明るいイメージを持ちやすい。

女性の性用語や思春期が明るい傾向にあるのは，からだの変化を肯定的に受け止めているといえ，高校生により強い傾向がある。

自己や親に対して否定的な傾向は，思春期がアイデンティティの確立に向けて不安定な時期であり，高校生はそういった状態を伺わせる。両親に対して自我を主張し，反抗・不満といった形で表れるが青年前期の葛藤の時期であることがわかる。看護学生は親の立場や気持ちを理解することができ，対等にかかわることができるようになる。両親に対して否定的な傾向は，両親の性の理解がしにくく，生殖以外の性の意義を考えにくい。また，自己への否定的な見方は自分自身の性行動への戸惑い・不安を生ずるだけでなく，性が生き方や人間関係と不可分であることを理解しにくいことによると考える。したがって，発達段階を考慮した上で，人間の

性と生き方をどう理解させるかが重要となるといえる。

5．結　　論

生殖の性に関する用語は明るく，妊娠中絶・避妊には暗いイメージを持っている者が多い。それらは看護学生に顕著にみられる。また，看護学生に女性の性用語は明るく，男性の性用語は暗い傾向がみられる。

自己や親に対し，高校生は否定的，看護学生は肯定的な傾向がある。看護学生は生命や生き方への考えも明確になってきている。これらは青年前期の発達課題と合致する。

以上の結果から，人間にとっての性の意義や男性の性行動を含む人間の性行動の理解を発達課題に応じて教授する必要がある。

この論文の趣旨は，第24回日本看護協会教育学会にて発表した。

文　　献

1）北沢杏子：心とからだ，いのちの絵本，岩崎書店，1987
2）ピーター・メイル，谷川俊太郎訳：ぼくどこからきたの？，河出書房，1976